

<書評>

高谷幸

『追放と抵抗のポリティクス——戦後日本の境界と非正規移民』
ナカニシヤ出版、2017年

大野聖良（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

本書は、戦後日本の非正規移民を追放する主権権力とその抵抗運動におけるポリティクスを考察したものである。具体的には、退去強制手続きをめぐる、どのような社会的・歴史的文脈のもと、法務省入国管理局が移住者を合法・不法に区分してきたのか、このような線引きに移住者や支援運動はどのように抵抗してきたのかを明らかにしている。高谷幸氏は移民研究を専門とする社会学者で、特定非営利活動法人「移住者と連帯する全国ネットワーク」（以下、移住連）の理事および貧困プロジェクトの一員として、移住者の権利擁護に関する市民運動に積極的に携わっている。本書では文献資料調査や支援組織の参与観察、支援組織スタッフや活動家へのインタビュー調査が組み合わされた形で用いられており、支援現場に従事してきた長年の経験が活かされている。では、本書を具体的に見ていこう。

第一章「追放と抵抗のポリティクスからみる戦後日本の境界」では、日本が「島国」から「グローバル社会」へと転換する中、先行研究では国家の境界の社会的意味が検討されてこなかったことを指摘する。境界は主権権力のみによって決定・維持されるのではなく、移住者や市民運動などのアクターとの交渉を通じて（再）形成されるという意味で動的であり、非正規移民には国家の境界と社会の関係性が如実にあらわれる。次章からそのポリティクスが具体的に検証されてゆく。

第二章「帝国と島国のはざま」では、1945年から1950年代、つまり内地と朝鮮半島間での人の移動が「密航」として禁止された時期を取り上げる。当時、非正規移民の大半は朝鮮人であったが、日本との国境正常化がなされていないため、韓国は被送還者の引き取りを拒否した。結果、日本はその解決策として在留特別許可の道を模索する。正規化では「誰を追放し、誰の在留を認めるべきか」が争われ、その線引きは戦後日本が追求する「人道」という理念や「日本への忠誠」「人情」という道徳的価値観によって正当化された。

第三章「呼び覚まされる帝国の記憶と〈戦後日本〉」では、1960年代後半以降の「密航者」支援運動を取り上げる。市民運動（ベトナム反戦運動・被爆者支援運動）は「密航者」との出会いを通じて、民主主義と平和を掲げる〈戦後日本〉が植民地支配の忘却と朝鮮人の排除の上に成り立った空間であることを認識してゆく。「密航者」は国境という物理的空間だけでなく、価値的空間の境界をも揺さぶり、問い直す存在であった。

第四章「グローバル化のなかの日本——追放と抵抗の連続と断絶」では、1970年代から顕著となる台湾、フィリピン、タイ等からの新しい移住者の流れに注目する。法政策や支援運動において旧植民地者から新しい移住者へ引き継がれたもの・引き継がれなかったものを考察し、2000年前後からの行政による非正規移民の「犯罪者化」は占領期につくられた追放構造と地続きにあると指摘する。

第五章「主権を無効化する空間」では、非正規移民を組織化する労働組合を取り上げ、行政による「不法滞在者」の線引きを無効化してきた運動の戦略を考察する。運動は、超越的な法として振舞う入管法を単なる一般法、非正規移民を「労働者」として再提示することで、合法・不法の線引きを問い直

し、主権による境界が及ばない空間をつくり出してきた。しかし、2000年代の「不法滞在者」対策強化を前にその戦略は限界を迎え、その後の支援運動では滞在が長期にわたる非正規移民の正規化が中心となる。

第六章『「違法性」と正規化の矛盾』では、日本人男性との間に子どもをもつ非正規移民女性の正規化（7・30通達）に注目する。非正規移民女性たちは「違法」とされる存在ゆえ、日本人男性に依存せざるをえない状況に陥りやすい。在留特別許可はそのような関係性からの脱却を可能にするが、そもそも制度上、女性による「日本人の母親」役割の遂行が前提とされ、子どもの認知など男性の協力が必要となる。支援現場でも、女性たちは「非正規」であるがゆえにあらゆる社会関係から切り離されているにもかかわらず、在留特別許可を獲得する際に彼女らが日本社会に適応していることを強調する。非正規移民女性の正規化には矛盾した論理が内在している。

第七章『「子ども」という価値』では、非正規滞在家族の正規化を取り上げる。もはや「人権」という法的価値に基づいた主張では在留特別許可を獲得できない中、支援運動では人格など道徳的価値を彼ら・彼女らが日本に滞在すべき根拠として用いる。しかし、それは「誰が日本にいてもよいか」の線引きにもなり、子どもは社会的・文化的適応や「違法性」における責任の無さから滞在が許可され、その親は親としての「資質」や違法性の責任を問われ、追放される。結果、同情に訴える支援運動の戦略は、非正規滞在家族の分断を正当化することになった。

終章「社会的・歴史的存在としての非正規移民と境界」では、非正規移民の追放と抵抗における論理と効果を振り返る。国家の境界は社会を枠づけ、人々を合法と不法に区分してきたが、その境界を絶えず揺さぶり、社会のメンバーとして非正規移民の生が肯定される空間を少しずつ切り開いてきた抵抗実践の可能性について言及する。

2000年代以降、日本では「治安回復」政策が実施されたと同時に、外国人嫌悪と結びついた「治安悪化」言説が流布し、「不法就労者」取締りと在留外国人の管理が強化されている。そのような中、本書は非正規移民をめぐる、戦後の行政と支援運動がせめぎ合う権力構造を明らかにした点で学術および支援実務において参照すべき著作である。特に、しばしば別個に語られる「オールドカマー」・「ニューカマー」の議論を社会的・歴史的に架橋する点は、移民研究・移民政策研究において独創的であり、昨今の日本の「移民政策」を再考するうえで必読の書となる。

非正規移民女性の合法・不法の線引きとしてジェンダー規範が作用していたという第七章の考察は、日本における入国管理のジェンダー分析を目指す評者にとって興味深い。しかしながら、本書ではジェンダー＝女性をいう意味合いが強く、「母親」「妻」という側面のみが切り取られている。単身非正規女性の正規化にはどのような規範が張り巡らされていたのか。労働組合など男性比率が圧倒的に高い支援運動において男性性がどのように作用しているのか。非正規移民の追放と抵抗にジェンダーが組み込まれている様相について、今後本書を土台にさらなる分析が期待される。